

産業都市における老人自己意識形成の考察

辻 正 二

1. はじめに

筆者はここ数年逸脱行動論の一つであるラベリング論からラベリング差別論の視点を模索し、その研究対象として高齢者差別(ageism)を検討してきた¹⁾。この研究の流れでこれまで老人化の地域比較、老人化の世代間比較、若者の老人差別意識、老人語の分析、老人自己意識類型の分析等を実際行ってきた²⁾。その際の基本的な問題意識はこうである。われわれの社会には老人に対して生物学的な「老い」を迎えたという以上に、まだ生物学的には「老い」の域に達していない人々にも「あなたは老人になったのだ」と言わさしめるなにか、つまりわれわれの抱く老人という観念やリアリティは、社会によってつくられるとみるべきではないのか。ことに、高齢になった人々が自分自身を「老人」と抱くようになるには、周囲の社会との相互作用が不可欠であり、社会からの「老人」という解釈・規定・処遇を受けて、自分を「老人」と思うようになるのではないであろうか。

1) 拙稿「ラベリング差別論序説」(『宮崎大学教育学部紀要』1983年3月, 第58号, 71-85頁)

2) 拙稿「老人化に関する社会学的一考察—老人差別の研究—」(『宮崎大学教育学部紀要』1990年3月, 第67号, 1-21頁), 拙稿「老人化処遇過程の社会学的研究—大学生の老人差別意識の分析による—」(『山口大学教養部紀要』1992年, 第25巻, 39-58頁), 拙稿「エイジングと社会」(『いのちと環境』「山口大学教養部総合コース講義録」1993, 第7号, 79-91頁), 拙稿「老人意識とラベリング: 自己ラベリングの視点から—」(『山口大学教養部紀要』1993年, 第27巻, 67-86頁)

産業化が高度に進んだわれわれの社会は、高齢者を「知恵袋」として尊敬の念をもって処遇することが少なくなった。そこでは「高齢」という事実は、高い価値を持つとは解釈されず、むしろ社会的な引退や隠遁が強要され、人目につかない所で、静かに暮らすべきという暗黙のモーレスが作用する。確かに、我が国では敬老精神がキリスト教国より強いのかも知れない。しかし、栗原彬の指摘を待つまでもないが、われわれの社会においても産業化の進行とともに、今日、こうしたモーレスが作用し、確実にエイジズムが進行してるといえるのではなかろうか³⁾。

ところで、老人化処遇の作用する社会では、自分自身を「老人になった」という自己認知（ここでは老人自己成就意識と呼んでおきたい）する時期が訪れる。高齢者は、ある年齢に達すると、周囲の人々の眼や期待、そして自分自身の老人イメージや老人観から、自分自身を「老人になった」と自己認知せざるを得なくなる。われわれが「老い」を自分自身で認めるのは、どのようにしてなのだろうか。老人化の成就過程を老人意識と自我像の分析を行うことから、ここでは老人意識の内面化のメカニズムを実証的に考察したい。

本稿では、産業都市での老人自己意識形成を見ることに主だった目標がある。ここでは昨年、北九州市八幡東区の尾倉地区を対象にして実施した調査のなかから、産業都市において老人化プロセスがどのようになっているのかを考察した。八幡東区は、インナーシティで分類すると、産業空洞型のインナーシティ地域に該当するとみてよいが⁴⁾、ここでの直接の調査対象地は、八幡東区のなかでインナーシティ化の進んだ尾倉公民館区（以下尾倉地区と呼ぶ）である⁵⁾。なお、本調査では、この尾倉地区の分析のために、宮崎市で実施した調査項目を比較データとして利用する。宮崎市の

3) 栗原彬「<老い>と<老いる>のドラマトゥルギー」『老いの発見1』(岩波書店),1986年,栗原彬「離脱の戦略」『岩波講座現代社会学13(成熟と老いの社会学)』(岩波書店)1997年,39-60頁

4) 北九州市尾倉地区の地域構造の分析については、拙稿「産業空洞型インナーシティにおける高齢者問題の一考察」(『社会分析』1997年3月,Vol.24,29-47頁)に詳しい。

データについては実施時期が1992年でやや古いですが、同一項目であり、比較データとして十分な価値があると思われる⁶⁾。

本稿の目的は、人が自分自身を老人とみるようになる老人化過程（自己レッテル）を分析することにあるが、老人自己成就意識の分析、老人意識類型の構成と分析、それらを自我像との関連で分析することを通して老人の自己レッテル化の側面を考察することにある。

2. 老人自己成就意識の分析

最初に、「老人になった」という老人自己成就意識形成過程を地域比較の中でみておきたい。ここで何故、地域比較の視点を導入するかの根拠を述べると、産業都市八幡で生活してきた高齢者たちは、この老人自己成就意識について他の地域などとは違った意識を持ち、さらに年齢別や性別においても違っているのではなかろうかという仮定に立っているからである。老人意識は、その社会の老人に対する役割期待、老人像などといった老人処遇過程のなかで形成される。I. ロソーによれば、現代社会の制度的の影響を受けて老人たちには地位の低下、ステレオタイプ、排斥、役割の喪失、役割の曖昧さ、若さの自己イメージといったものを経験したり、身につけるといふ⁷⁾、老人という地位取得や老人像の価値の内面化は、当然、その社会のシステムに始源をもち、さらに当該社会の文化構造（特に、老人文

5) 調査は、八幡東区の尾倉地区（公民館区）に居住する65～79歳の男女を対象に、520人を平成7年6月1日現在の北九州市住民基本台帳名簿より、無作為抽出法により抽出。平成8年1月23～平成8年2月5日にかけて実施した郵送法によって得たものである。有効回収率は、368票の72.7%であった。郵送法を使つての調査としては極めて高い回収率であった。

6) 宮崎市調査は市内全域を調査したもので、農業地帯、商業地帯、旧市街地、新興団地を網羅している。それに対して尾倉地区は、インナーシティ化した地域の住宅地域（宮崎市でいえば旧市街地に該当）である。ここでは尾倉地区の調査対象者年齢と同じく65～79歳層に関して再抽出し、比較データとして利用している。

7) I. Rosow, Socialization to Old Age, 1974 (University of California Press), 嵯峨座晴夫監訳『高齢者の社会学』1983 (早稲田大学出版)

化) に結びついたかたちで惹起しているはずである。その意味では、老人自己成就意識は、性別役割、年齢別役割、地域構造などに反映されていると考えられる。

表-1 性別・性年齢別にみた老人自己成就意識

		尾倉地区				宮崎市			
		実数	思う	思わない	不明	実数	思う	思わない	不明
全 体		368	55.7	41.6	2.7	360	65.0	34.4	0.6
性 別 (1)	男性	150	52.7	44.7	2.7	183	59.3	40.1	0.5
	女性	216	58.3	38.9	2.8	175	70.9	28.6	0.6
年 齢 別 (2)	65~69歳	120	33.3	65.0	1.7	137	41.6	56.9	1.5
	70~74歳	150	60.7	36.0	3.3	116	75.0	25.0	—
	75~79歳	95	77.9	18.9	3.2	107	84.1	15.9	—
65~69歳	男性	57	36.8	61.4	1.8	3	38.4	60.3	1.4
	女性	63	30.2	68.3	1.6	62	45.2	53.2	1.6
70~74歳	男性	57	49.1	47.4	3.5	60	70.0	30.0	—
	女性	93	67.7	29.0	3.2	56	80.4	19.6	—
75~79歳	男性	36	83.3	13.9	2.8	49	77.6	22.4	—
	女性	59	74.6	22.0	3.4	57	89.5	10.5	—

(備考) 尾倉地区 ((1) $\chi^2=1.23, fd=1$, (2) $\chi^2=48.82, fd=2$), 宮崎市 ((1) $\chi^2=5.31, fd=1$, (2) $\chi^2=53.30, fd=2$)

まず、表-1は、「あなたは『老人になった』と思うか」という設問を地域別・性別・年齢別にみたものである。これをみると尾倉地区の高齢者で「思う」と答えたのは、55.7%で、「思わない」と答えたものより僅かに多かった。これを性別で見ると、「思う」の回答は、男性より女性の方に6%ほど多く、年齢別で見ると、「思う」という回答は、年齢が上昇するとともに増加する。しかも、男女別に5歳階層別の推移をみると、加齢と共に「思う」という割合は、増加する。つまり、ここでいう老人自己成就意識は、加齢と密接に関連していることが分かるのである。尾倉地区の数値だけでは一般化できないので、そこで、宮崎市のデータを通して考察してみよう。尾倉地区と同様に「老人になった」という意識が宮崎市でも加齢化とともに増加する傾向が確認でき、この点で、老人自己成就意識が高齢者の間で

加齢とともに意識的に内面化する形で進行することは間違いなさそうである。では、性別ではどうだろうか。宮崎のデータでは、女性の方の比率が高い。この点も尾倉地区と同様である。尾倉地区ではやや女性の方に老人自己成就意識の持ち主が多くなっているが、宮崎市では男女の差がでて、女性で顕著な比率（70.9%）を示す。さらに年齢別に男女差をみると、宮崎市ではどの年齢層においても男性より女性の方に老人自己成就意識の比率は高い。つまり、宮崎市では女性の方が男性に比べて「老人になった」という意識を早く身につけ、後期高齢層の年代ではほぼ9割の女性にまでこの意識は拡大する。これに比べると、尾倉地区の場合は、「老人になった」という意識が男女で違ったパターンを示すのである。つまり、「思う」と答えた比率を拾うと、男性の場合、65～69歳が36.8%、70～74歳が49.1%に留まるが、それが後期高齢期の75～79歳層となると、一挙に増加し、8割強を数えるまで増加する。しかも、女性の割合よりもかなり高い比率を示す。これに対して女性の場合、65～69歳では30.2%に留まっているが、70～74歳では67.7%、75～79歳では74.6%と、70歳以上の年代で2倍強の伸びを示し、それ以後少しか増加しない。つまり、以上からみると老人自己成就意識の形成は、尾倉地区の場合では男性の一部で早めに始まるが、それは一部で、過半数以上が老人自己成就意識を持つのは、むしろ女性の方がやや早くはじまるということである。インナーシティの高齢者の老人自己成就意識の形成は、70歳以上で惹起し、男性の方は75歳を越えると、一挙に増加する傾向を示しているのである。

以上より産業都市である尾倉地区には老人自己成就意識を形成するメカニズムが、宮崎市とは違っていることが判明する。つまり、尾倉地区には、農村地域を控えた地方中核都市の宮崎市に比べ、老人自己成就意識を抑止する「何か」が働いていると考えることができる。ただし、前期高齢期の初期の段階である65～69歳では、女性より男性に老人自己成就意識を強化する「何か」が働いているということも注意しなければならない。

そこで、この「何か」を探るために、老人自己成就意識（つまり「老人になっ

表-2 「調査項目と回答肢」

客観的要因	回答肢(並び順)	主観的要因	回答肢(並び順)	
性別	1. 男性……2. 女性	住みやすさ	1. 住みやすい……4. 住みやしくない	
年齢別	1. 55歳以上……7. 80歳以上	老後の不安感	1. ある……2. ない	
居住年数	1. 5年未満……7. 50年以上	敬老精神の有無	1. ある……2. ない	
同別居形態	1. 同居……2. 別居	いやな思い	1. そう思う 3. そうは思わない	
家族員数	1. 1人……7. 7人以上	呼ばれて気になる	1. ある……2. ない	
職業	1. 有職……2. 無職	老人排除認知	1. ある……2. ない	
学歴	1. 9年……3. 13年以上	社会的地位の喪失	1. はい……2. いいえ	
世帯収入	1. 5万円未満~7. 50万円以上	家族連帯の喪失	1. はい……2. いいえ	
親しい人の総数	1. 0人……7. 51人以上	バイオメディカルな地位喪失	1. はい……2. いいえ	
親類数	1. 0人……7. 51人以上	経済的自立の喪失	1. はい……2. いいえ	
近所の人の数	1. 0人……7. 51人以上	自我像	生きがい感	1. そう思う…4. そう思わない
友人数	1. 0人……7. 51人以上		生活満足度	1. そう思う…4. そう思わない
集団加入数	1. 0個……6. 5個以上		孤独ではない	1. そう思う…4. そう思わない
相談相手の有無	1. いる……2. いない		自分の存在満足度	1. そう思う…4. そう思わない
			家族に誇りをもつ	1. そう思う…4. そう思わない
			自己の能力発揮度	1. そう思う…4. そう思わない
			社会的不可欠性	1. そう思う…4. そう思わない
			社会的貢献能力	1. そう思う…4. そう思わない
		ボランティア活動参加	1. はい……2. いいえ	

た」という意識)の客観的側面,主観的側面を調べてみたい。表-2は,高齢者調査で実施した項目とその回答肢の内容を示したものである。回答肢欄には,各調査項目の回答肢の並び(例えば,「1. はい……2. いいえ」のような)が示されている。これらのうち約半数が性別や年齢などといった個人の社会的地位属性であり,後の残りは個人の主観的な意識を示している。

(1) 老人自己成就意識の客観的基盤

そこで,さきに触れた尾倉地区で老人自己成就意識を抑止する「何か」,男性に老人自己成就意識を強化する「何か」とはどのような基盤を背景にして存在するのかをみてみたい。まず,この「老人になった」という意識がどのような基盤に支えられているかを,今回調査した項目から探りたい。具体的には13項目の客観的屬性間の相関度から探ることになる。表-3は,

表-3 「老人になった」意識の客観的基盤と主観的基盤

客観的要因	相関係数		主観的要因	相関係数		
	尾倉地区	宮崎市		尾倉地区	宮崎市	
性別	0.01725	-0.05933	住みやすさ	-0.03734	-0.03463	
年齢別	-0.30633**	-0.37332**	老後の不安感	-0.03371	0.14531*	
居住年数	-0.02043	0.00528	敬老精神の有無	-0.03328	0.08147	
同居形態	0.00479	0.13796*	いやな思い	-0.04320	0.05515	
家族員数	0.13521	-0.05043	呼ばれて気になる	-0.28456**	-0.25605**	
職業	-0.27701**	-0.07795	老人排除認知	0.05713	0.10774	
学歴	0.18315**	0.04309	社会的地位の喪失	-0.11282	-0.09512	
世帯収入	0.16663*	0.18566**	家族連帯の喪失	-0.04269	-0.02511	
親しい人の数	0.20132**	0.16851*	バイオメディカルな地位喪失	0.00836	0.01698	
親類数	0.12174	0.13343*	経済的自立の喪失	0.16642*	0.07352	
近所の人	0.11560	0.08080	自我像	生きがい感	-0.27254**	-0.18026**
友人	0.22861**	0.15023*		生活満足度	-0.08996	-0.14039*
集団加入数 ⁽¹⁾	0.19454**	0.10219		孤独ではない	-0.02273	-0.11903
相談相手の有無	-0.07001	-0.10564		家族に誇りをもつ	-0.03921	-0.06850
				自己存在満足度	-0.14872*	-0.11360
				自己能力発揮度	-0.27629**	-0.09394
				社会的不可欠性	-0.29779**	-0.12305
				社会的貢献能力	-0.21465**	-0.12890
			ボランティア活動参加意思	-0.20128**	-0.15941*	

(備考) 数値は相関係数で, (***)は1%で有意 (***)印は5%で有意を示す。
(1) 集団参加数については調査の尺度が違っている。

その相関係数を示したものである。13項目のうちでは年齢、職業、友人数、集団加入数、学歴、収入、親しい人の総数の7つの設問との間に1%~5%の有意の相関度が見られた。高い順に配置すると、もっとも相関係数の高いのは年齢(-0.306330)ある。以下職業(-0.27701)、友人数(0.22861)、親しい人の数(0.20132)、集団加入数(0.19454)、学歴(0.18315)、世帯収入(0.16663)という順である。つまり、この相関関係の意味するものを具体的に表記すると、尾倉地区の場合、老人自己成就意識は、以下のような傾向を持つことを示している。

- ①年齢別にみると、この老人自己成就意識は、若い年代の人よりも年長の年代になるほど、この意識を持つ割合が多くなる傾向を示す。
- ②職業別では、職業を持っている人と比べて、職業を持たない人ほど、

この老人自己成就意識を持つ傾向がみられる。

- ③友人数でみると、友人数を多く持つ人に比べて、友人数の少ない人ほど、この意識を持つ傾向がみられる。
- ④親しい人の総数でみると、親しい人の総数の多い人に比べて、親しい人の総数が少ない人ほど、この意識を持つ傾向がみられる。
- ⑤集団加入数でみると、集団加入数を多く持つ人に比べて、集団加入数の少ない人ほど、この意識を持つ傾向がみられる。
- ⑥学歴別でみると、高学歴の人に比べて、低学歴の人ほど、この意識を持つ傾向がみられる。
- ⑦世帯収入でみると、世帯収入の多い人に比べて、世帯収入の少ない人ほど、この意識を持つ傾向がみられる。

つまり、この老人自己成就意識の形成には、加齢（年齢）属性、職業属性、学歴属性、経済的属性（収入）、そしてインフォーマルな人間関係属性（友人数、親類数、親しい人の総数）、フォーマルな社会関係属性（集団加入数）が関係しているということである。特に、この尾倉地区でみると「老人になった」という老人自己成就意識形成の客観的基盤は、加齢、友人関係、職業、学歴、経済的属性の5要因（1%で有意）が強く働いていることがわかる。

ところで、尾倉地区の老人自己成就意識の固有なる特徴を探るために、ここで、尾倉地区調査より5年前に実施した宮崎市のデータを参考に比較してみたい。宮崎市で「老人になった」という意識に相関する客観要因は、年齢別、同別居形態、世帯収入別、親しい人の総数、親類数、友人数の6つの要因である。①、③、④、⑦は、宮崎市においても確認できる。その意味では、年齢別、友人数、世帯収入、親類数、親しい人の総数といった要因は、老人自己成就意識を形成する上で一般的に作用する要因と考えることができそうである。しかし、両地域の比較からは、こうした共通点ばかりが確認できるわけではない。尾倉地区で有意の相関関係を示した②の

職業別と⑤の学歴別の2要因は、宮崎市では、確認できなかったからである。反対に、宮崎市で有意な相関関係を示した同別居形態と親類数については、尾倉地区では相関を示さない。この他に、宮崎市では、年齢、世帯収入の相関係数が尾倉地区より大きく、逆に友人数、親しい人の総数の値は、尾倉地区の方が宮崎市より大きくなっている。こうしたことを考えると、産業都市である尾倉地区の場合、職業や学歴、そして友人数と親しい友人の合計数という要因は、宮崎市に比べて一層老人自己成就意識形成に関わっていることが分かるし、宮崎の方は年齢、同別居形態、世帯収入、親類数という要因が一層老人自己成就意識形成に関わっていることが分かる。いずれにしても宮崎市の調査では、子供と同居している高齢者に老人自己成就意識をもつ傾向が増え、また親類数が多い人に比べて、親類数の少ない人ほど、老人自己成就意識を持つ傾向がみられるということが特徴をなしていたということはいえるであろう。

ところで、いま一つ別の角度で尾倉地区の高齢者の特徴を示してみよう。表-4は、尾倉地区と宮崎市の高齢者に関して性別、職業の有無別、学歴別にそれぞれの相関係数を求めたものである。これをみると、宮崎市と尾倉地区の特徴が明瞭になる。つまり、尾倉地区では職業と学歴との間で相

表-4 性別・職業の有無別・学歴別の相関マトリックス

	尾倉地区			宮崎市		
	性別	職業別	学歴別	性別	職業別	学歴別
性別	1.00000			1.00000		
職業別	0.11589*	1.00000		0.20039**	1.00000	
学歴別	-0.06000	-0.18464**	1.00000	-0.18160**	0.09322	1.00000

備考) 数値は相関係数で、(**)は1%で有意(*)印は5%で有意を示す。

関が一番高いのに対して、宮崎市では性別と職業別との間で相関係数が一番高い。しかも、職業別と学歴別の間では相関は認められない。つまり、

宮崎市では有職性（職業をもつということ）が男性に傾斜し、学歴も男性の方が高学歴傾向を示している。尾倉地区では高学歴層に有職性が高く、宮崎にみられたほど有職性が男性に傾斜していないのである。つまり、性別役割という生得的地位属性がかなり働いている宮崎市と比べれば、学歴や職業という達成的地域属性がより働いている尾倉地区の方が近代化された地域であることが、このことより証明されるのである。実は、尾倉地区において老人自己成就意識の抑止要因として働く「何か」とは、こうした産業都市において職業を失うことが如何に老人自己成就意識を醸成するかを暗示させるものとなっているのである。

以上から、先に挙げた尾倉地区の方で老人自己成就意識を「抑止」し、また男性において早期に老人自己成就意識を促進する「何か」が職業と学歴という要因に大きく関係していることが了解できる。

表-3の中からいまひとつ触れておかなければならないことがある。それは、尾倉地区と宮崎市を比較して気づくのであるが、両地域にはインフォーマルな人間関係とフォーマルな社会関係に顕著な差が確認できることである。まず、尾倉地区でみると、「老人になったな」という老人自己成就意識が相関しているのは、インフォーマルな人間関係量の友人数、親しい人の総数の二つだけである。また、この老人自己成就意識は集団加入数との間でも有意な相関関係がみられる。これに対して宮崎市ではインフォーマルな面でこの老人自己成就意識が相関しているのは、友人数、親族数、親しい人の総数の三つの間である。そして、フォーマルな社会関係量では有意な相関は確認できない。さらに、両地域とも近所の人の数に関しては有意な相関はみられない。それ故、この両地域のインフォーマルな面での特徴は尾倉地域が友人数にウエイトを置いているのに対して、宮崎市は、親類数にややウエイトを置いている地域であるということであろう。両地域では、共に友人数や親しい人の増加とともに「老人になった」と思わなくなる傾向がみられるが、尾倉地区では友人数が大きく作用するのに対して、宮崎市では親族数の影響も加わるということである。

この他に尾倉地区ではこの老人自己成就意識は、公式集団(フォーマル・グループ)への参加数も相関度を示しており、集団加入数の少ない人ほど「老人になったな」と思う傾向をもつということである。これは宮崎市と違う点である。

(2) 老人自己成就意識の主観的意識構造

これに対して、この「老人になったな」という意識の主観的基盤ではどうであろうか。表-3には、住みやすさ、老後の不安感、敬老精神、「老人と呼ばれて気になる」、老人排除認知、老後開始規定要因、老人自我像、ボランティア参加意思など19項目の主観的要因を示している。これらは、住環境への評価、老後観・老人意識、自我像、社会参加意思(ボランティアへの)からなる。そして、老人自己成就意識との間で相関係数を求めたものである。尾倉地区で老人自己成就意識に関して有意の相関関係を示したのは、老後開始規定要因の経済的自立の喪失、自我像の生きがい感、自己存在満足度、自分の能力発揮度、社会的不可欠性、社会的貢献能力、ボランティア参加意思の8項目である。いま、相関係数の高いものから拾うと、社会的不可欠性(-0.29779)、「老人と呼ばれて気になる」(-0.28456)、自分の能力発揮度(-0.27629)、生きがい感(-0.27254)、社会的貢献能力(-0.21465)、ボランティア活動への参加(-0.20128)、経済的自立の喪失(0.16642)、自己存在満足度(-0.14872)の順となっている。これらの相関関係の意味内容を説明すれば、以下のようなになる。

- ①自分を社会的に不可欠な存在と思う人に比べて、思わない人ほど老人自己成就意識を持つ傾向がある。
- ②老人と呼ばれて「気になる」人に比べて、「気にならない」と答えた人ほど、この意識を持つ傾向がある。
- ③自分の能力が発揮できていると「思う」人に比べて、発揮できないと「思う」人ほど、この意識を持つ傾向がある。

- ④自分が生きがいを持っていると「思う」人に比べて、生きがいを持っていると「思わない」人ほど、この意識を持つ傾向がある。
- ⑤自分が社会的に貢献できていると「思う」人に比べて、貢献できると「思わない」人ほど、この意識を持つ傾向がある。
- ⑥ボランティア活動への参加意志が「ない」と答えた人ほど、この意識を持つ傾向がある。
- ⑦老後の開始要因として、他の要因に比べて、経済的自立の喪失要因を挙げた人ほど、この意識を持つ傾向がある。
- ⑧自分の存在に満足感を抱いている人に比べて、満足感を抱いていない人ほど、この意識を持つ傾向がある。

これら8つの命題群のうち①, ③, ④, ⑤, ⑧は、いずれも自我像項目である。ところで、ここでの8つの自我像項目は、「生きがい感」と「生活満足度」の双方が「生活要因」として、「孤独ではない」と「家族に誇りをもつ」の双方は「家族要因」として、「自己存在満足度」と「自己能力発揮度」の双方が「自己要因」として、「社会的不可欠性」と「社会的貢献能力」の双方が、「社会要因」として位置づけられ、その全体として自我像を構成するものと考案されている。尾倉地区で有意の相関を示したのは、「生活要因」のうちの「いきがい感」と「自己要因」の二つ、「社会要因」の二つである。この老人自己成就意識は、「家族要因」とは相関を示さなかった。つまり、自我像項目で相関を示したのは、高齢者自身の目標、能力の肯定、存在の肯定、社会の必要性の肯定を表わす項目であって、いわば主体的な高齢者像を表明した項目であった。この他に有意の相関を示したのは、「老人と呼ばれて気になる」という項目と老後開始要因における経済的自立の喪失という項目であった。つまり、老後の開始を規定するという要因（「経済的自立の喪失」、「社会的地位の喪失」、「家族的連帯の喪失」、「バイオメディカルな要因の喪失」）のうち、「経済的な自立の喪失」をあげた人ほど「老人になった」と意識する割合が増加する傾向がみられた⁸⁾。この事実か

らも、尾倉地区において有職性が老人自己成就意識形成に関連していることが確認できる。

ところで、老人自己成就意識と相関する主観的要因を先ほどと同様に、宮崎市についてみてみると、宮崎市では「老後の不安感」、「呼ばれて気になる」、「生きがい感」、「生活満足度」、「ボランティア活動参加意思」の間で有意の相関が見られる。そのうち尾倉地区と同じものは「呼ばれて気になる」、「生きがい感」、「ボランティア活動参加意思」(つまり②、④、⑥)だけである。主観的要因に関して相関関係を示す項目は、両地域でかなり違っている。宮崎市のデータでは「老後の不安感」、「生活満足度」が新たに相関関係を示している。つまり、宮崎市では老人自己成就意識形成には老後に不安感を抱かない、生活満足感を抱かないということが関係していた。それに対して八幡東区の尾倉地区では②、④、⑥の値が宮崎市の相関係数より大きく、しかも自己像の「自己要因」と「社会要因」、そして経済的自律の喪失との間においても相関しており、ここには尾倉地区の老人自己成就意識が積極的に社会参加をしたり、自分という存在に自信を抱くということに関係しているということを示している。尾倉地区では老人自己成就意識は、住環境の評価や老後観などとは相関せず、積極的参加する意思、自分の存在や自分の能力発揮できるという自信に関係し、こうした意識を持たないこと、つまり消極的な自我像の持ち主に多くなることを示し

8) ここでの老後開始規定の設問は、「あなたにとって、『老後』とは、どのような時を境にして始まるとお考えですか」というものであり、使った回答肢は、「1. 仕事をやめたり、仕事を他の人に任せるようになったとき(退職)」、「2. 年をとって、家事を他の人に任せるようになったとき(主座を渡す)」、「3. 年をとって身体が自由がきかないと感ずるようになったとき(身体の不自由)」、「4. または夫と死別したとき(配偶者の死)」、「5. 子どもが結婚して独立したとき(子供の独立)」、「6. 年金が収入をささえるとき(年金生活の開始)」、「7. その他」である。この内、「退職」と「主座を渡すということ」を挙げたものをここでは「社会地位の喪失」と呼ぶ。以下「身体の不自由」を挙げたものを「バイオメディカルな地位の喪失」、「配偶者の死」と「子供の独立」を「家族的連帯の喪失」、「年金生活の開始」を「経済的自立の喪失」と呼んでおきたい。拙稿「エイジングと社会」『いのちと環境』(山口大学教養部総合コース講義録, 1993年, 第7号) 79-91頁

ている。無能力の承認が老人自己成就意識形成と結びついていることが分かるのである。

(3) 老人と呼ばれて気になる主観構造

ところで、上で老人自己成就意識との間で最も相関度の高い値を示した「老人と呼ばれて気になる」という要因は、どのような主観構造の上に成り立っているのかをみてみよう。

ここでも先の表-2と同じ項目群について相関係数を求めてみた。表-5をみても明らかなように、「老人と呼ばれて気になる」という意識に関しては有意な相関を示すものがほとんどないことが分かる。尾倉地区に関してみると、客観的要因では年齢別(0.27318)とだけ有意の相関が見られ、主観的要因でも「老人になったな」(-0.28456),「いやな思い」(0.23403)

表-5 「老人と呼ばれて気になる」意識の客観的基盤と主観的基盤

客観的要因	相関係数		主観的要因	相関係数		
	尾倉地区	宮崎市		尾倉地区	宮崎市	
性別	-0.08599	-0.12371	住みやす	-0.04009	0.01004	
年齢別	0.27318**	0.10245	老後の不安感	0.04297	-0.03709	
居住年数	-0.00940	0.00823	敬老精神の有無	-0.11383	0.06305	
同居形態	0.02421	-0.08353	老人になったな	-0.28456**	-0.25605**	
家族員数	-0.01456	0.18332*	いやな思い	0.23403**	0.24087**	
職業	0.06509	0.04970	老人排除認知	0.05282	0.00357	
学歴	-0.01318	0.02511	社会的地位の喪失	-0.03299	0.03469	
世帯収入	-0.09154	-0.05572	家族連帯の喪失	-0.07664	0.07230	
親しい人の数	-0.05173	0.02856	バイオメディカルな地位喪失	-0.03105	0.00919	
親類数	-0.06802	0.02941	経済的自立の喪失	-0.03154	-0.09566	
近所の人	0.04423	-0.00534	自我像	生きがい感	0.06558	0.18145**
友人	-0.08287	0.00629		生活満足度	0.06452	0.11321
集団加入数 ⁽¹⁾	0.00867	-0.02982		孤独ではない	0.00383	0.05354
相談相手の有無	0.11621	-0.01741		家族に誇りをもつ	-0.01258	0.13564*
				自己存在満足度	0.06747	0.15643*
				自己能力発揮度	-0.03361	0.10417
				社会的不可欠性	-0.10634	0.11433
				社会的貢献能力	0.10991	0.03504
				ボランティア活動参加意思	-0.00290	0.09524

(備考) 数値は相関係数で、(**)は1%で有意を(*)印は5%で有意を示す。
(1) 集団参加数については調査の尺度が違っている。

の二つしか相関していない。これに比べると、宮崎市では少し多い。すなわち、この「気になる」という項目と相関を示したのは、客観的要因では家族員数 (0.18332) だけであり、主観的要因では、「老人になったな」 (-0.25605), 「いやな思い」 (0.24087), 「生きがい感」 (0.18145), 「家族に誇りをもつ」 (0.13564), 「自己存在満足度」 (0.15643) が有意の相関を示している。つまり、尾倉地区では年齢の若い人ほど「気になる」傾向を示し、「老人になったな」と思わない人ほど「気になる」傾向を示し、「いやな思い」を経験した人ほど「気になる」傾向を示しているということ、一方の宮崎市では、家族員数の少ない人ほど「気になる」傾向を示している。「老人になったな」と「いやな思い」は、尾倉地区と同じである。宮崎市では、「生きがい感」と「家族に誇りをもつ」、「自己存在満足度」を肯定する人ほど、「気になる」傾向を示していた。宮崎市では、この「老人と呼ばれて気になる」という意識は、家族の規模と自我像の一部（生活要因、家族要因、自己要因）と連関しているが、今回調査した尾倉地区では年齢、つまり若さが関連していた。

3. 老人意識類型の分析

以上はラベリングを受けた人が老人意識をもつようになる側面をみたものであるが、ラベリング状況は、現実には他者との相互作用状況で当然生起する。そこで、自己認知（自己承認）と他者規定の双方が作用している中で、老人意識形成がどうなっているかという側面もみておかなければならない。

エイジズムの研究においてこれまで差別や偏見の観点から老人類型を提出したものがないわけではない。例えば、パルモアは、マートンの差別類型を参考にして老人類型を指摘している⁹⁾。彼の類型は、「受容」、「拒

9) Erdman B. Palmore., 1990, AGEISM: Negative and Positive, (Springer Publishing company) 奥山正司他訳『エイジズム』（法政大学出版局）1995年

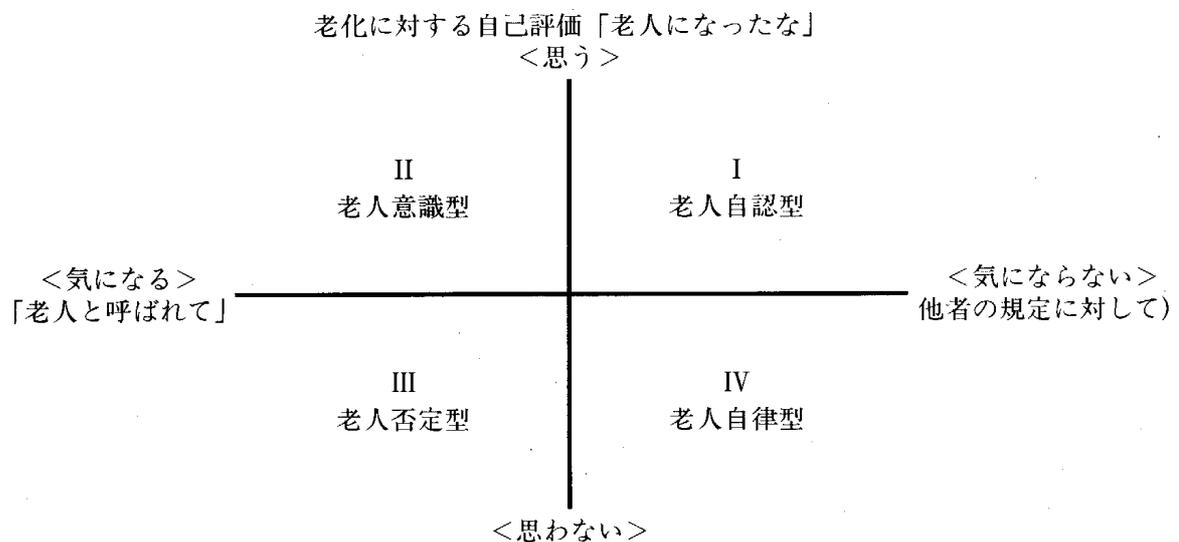
否」,「回避」,「改革」の4類型であるが,「受容」とは自主的受容と無関心をするタイプであり,「拒否」型は,化粧品や形成手術,「若い」ように振る舞う,見せかけるタイプである。そして,「回避」のタイプは,隔離,孤立,アルコール依存症,薬の乱用,精神病,自殺等にみられるタイプである。最後の「改革」のタイプは,高齢者の異文化集団,政治活動,組織的ロビー活動,公教育,個人的挑戦をおこなうタイプである。しかし,パルモアの類型は,社会的適応過程からなされる行動的類型であって,ここで考察している老人が自身を老人とみなす過程を分析するための類型ではない。

(1) 老人意識類型の構成

われわれは,ここで相互作用過程において「老人」というラベリングが作用するという前提にたって,老人意識を今回調査した項目から試論的に構成してみよう。

そこで,これまでみてきた設問である「老人と呼ばれて気になる」という項目と「老人になったな」という項目を使って,新たに老人意識類型を構成してみたい。「老人と呼ばれて気になる」という項目は,他者から老人だと呼ばれ,そのことが気になるということ,つまり他者のラベリングとそれを気にする自己についての設問である。いわば対他存在性とラベリン

図-1 老人意識類型



グを気にする自己の存在を捉えた項目である。これに対して「老人になったな」という項目は、生活世界で自分自身を老人になったと確認しているかどうかを聞いた設問である。それぞれについて承認と不承認の回答肢があるので、老人意識類型は4つのタイプが可能となる。それを図示すると図-1のようになる。

まず、第Iのタイプは、人から「老人と呼ばれ」ても「気にならない」と答え、「老人になったと思うか」という設問では老人になったと「思う」と答えたタイプである。ここでは「老人自認型」と呼んでおきたい。ロソーの「受容」のタイプはこの中に入るであろう。

第IIのタイプは、「老人と呼ばれる」と「気になる」が、自分自身「老人になった」と「思っている」タイプである。ここでは「老人自意識型」と呼んでおきたい。

第IIIのタイプは、「老人と呼ばれる」と「気になる」が、「老人になった」とも「思わない」タイプで、ここでは「老人否定型」と呼んでおきたい。

最後の第IVのタイプは、「老人と呼ばれて」も「気にならない」し、「老

表-6 地域別・年齢別にみた老人意識類型

		合計	老人 自認 型	老人 自意 識型	老人 否定 型	老人 自律 型	不明
尾 倉 地 区	全 体	368	31.5	10.1	14.1	17.4	26.9
	男 性(1)	150	34.0	7.3	14.0	20.0	24.7
	女 性	216	30.1	12.0	13.9	15.7	28.2
	65~69歳(2)	120	16.0	5.0	24.2	21.7	32.5
	70~74歳	150	34.0	14.0	12.7	17.3	22.0
	75~79歳	95	47.4	10.5	3.2	12.6	26.3
宮 崎 市	全 体	360	42.2	14.2	16.4	15.0	12.2
	男 性(3)	182	42.3	8.2	18.7	17.6	13.2
	女 性	175	41.7	20.6	13.7	12.6	11.4
	65~69歳(4)	137	24.8	11.7	28.5	25.5	9.5
	70~74歳	116	50.0	16.4	8.6	10.3	14.7
	75~79歳	107	56.1	15.0	9.3	6.5	13.1

(備考) (1) $\chi^2=3.11, fd=3$, (2) $\chi^2=41.83, fd=6$, (3) $\chi^2=12.4, fd=3$, (4) $\chi^2=53.21, fd=6$

人になった」とも「思わない」タイプである。ここでは「老人自律型」と呼んでおきたい。

尾倉地区では、「老人自認型」が一番多く、全体の31.5%がこのタイプであり、次いで多いのが「老人自律型」で、このタイプは全体の17.4%である。「老人否定型」は、全体の14.1%しかみられず、「老人自意識型」は、全体の10.1%しかみられなかった。なお、3割近くが「不明」となっているのは、「老人と呼ばれて気になる」という設問には「どちらでもない」という回答肢があり、それが尾倉地区で26.9%も「不明」がでた理由である。

(2) 老人意識類型とその諸相の分析

最初に、老人意識類型の各類型ごとの特徴を素描しておこう。「老人自認型」は、65～69歳では16.7%しかみられないが、75～79歳以上では47.4%になり、年長者ほど多くなる傾向を示している。そしてこの類型は、60歳代まではそれほど多くない(16%)が、70歳を越えると3割から4割を占めるようになる。「老人自意識型」は、60歳代では5%に留まるが、70～74歳になると、14%と、3倍近くに増加し、75歳以上ではやや減少する。つまり、70～74歳層に支持層が多い。これに対して「老人否定型」は、65～69歳の年齢層に多い。「老人自律型」は、65～69歳に多い。こうしてみると、ここで考察する老人意識類型は、加齢化とともに「老人否定型」・「老人自律型」→「老人自意識型」→「老人自認型」へと進む傾向をもつことが読み取れる。

表-7は、性別、年齢別、家族類型別、同居別、出身地別、居住年数別、学歴別、住居形態、世帯収入別に老人意識類型を構成している主要な特性を抽出したものである。

そこからここでの各類型を概観すると、「老人自認型」は、年齢は75～79歳の後期高齢層に多く、男性に多くみられる。このタイプは、世帯構成は単独世帯のものが多く、持ち家共同住宅ないし持ち家の住居形態の生活者で、職業は「無職」のものが多く、学歴のうえでは低学歴層が多い。

これに対して「老人自意識型」は、女性に多くみられるものの、ただ年齢的には「老人自認型」よりやや若く、70～74歳の前期高齢期層に比較的多くみられる。世帯構成では高齢者と未婚の子からなる高齢者核家族世帯にみられ、民間の借家に住んでいる人が多かった。居住年数は、30年～40年未満で、職業に関しては、まだ仕事を持っている人に多く、学歴は低学歴層で、収入は5～10万円の層に多かった。

表－7 老人意識類型の属性別構成

	老人自認型	老人自意識型	老人自律型	老人否定型
性別	男性	女性	男性	男性
年齢	75～79歳	70～74歳	65～69歳	65～69歳
家族類型別	単独世帯	高齢者と未婚の子	単独世帯	拡大家族
子供との同別居	別居	別居	同居	別居
住居形態	持ち家共同住宅	民間の借家	借家共同住宅	民間の借家
出身地別	県内生まれ	県	地元	市内
居住年数	50年以上	30～40年未満	5年未満, 20～3年	40～50年未満
学歴別	低学歴	低学歴	高学歴	高学歴
就労の有無	無職	有職	有職	有職
収入別	10～15万円	5～10万円	50万円以上	50万円以上

第三の「老人自律型」は、男性に多くみられ、年齢としては65～69歳の世代に多い。世帯構成は単独世帯、住居借家共同住宅に住んでいる人が多い。聴業はまだ持っており、出身地は地元出身で、住みだして5年未満と新しいか20～30年ぐらゐの居住年数のもの、学歴は、高学歴に多かった。

最後の「老人否定型」は、男性に多く、年齢的には65～69歳の年代に一番多い。そして世帯構成は、拡大家族で、住居形態は、「民間の借家」の人が多。学歴は高学歴で、まだ仕事を持っている人、市内生まれで、居住歴40～50年の人、世帯収入は、50万円以上になるような層にみられる。

(3) 老人意識類型の基盤と心理的特性

まず、以上の4つの老人類型がどのような社会構造的性格をもつか分析してみたい。そのために親密な人間関係であるインフォーマル・グループ

と団体や集団への参加の数量から捉えてみたい。ここでのインフォーマル・グループとは、高齢者が親しくしている人であり、ここではインフォーマルな人間関係量と呼んでおく。それからフォーマル・グループの数をここではフォーマルな社会関係量と呼んでおきたい。インフォーマルな人間関係量については「総数」,「親類」,「近所」,「友人」の4つから捉えている。

表-8から人間関係量と社会関係量をを表示したものであるが、まず、尾倉地区の人間関係量をみておこう。表からは親しい人の「総数」では「老人否定型」が16.8個と、一番多く、次いで「老人自律型」が14.8個,「老人自認型」が13.2個,「老人自意識型」が7.7個となっている。これをさらに細かくみると、「親類」,つまり血縁関係の数では、「老人否定型」が6.0個と一番多く,「老人自律型」(4.4個),「老人自認型」(3.9個)とつづき,「老人自意識型」(3.3個)で一番少ない。他方「近所」,つまり地縁関係の数では,「老人自律型」が4.7個と一番多く,「老人否定型」(3.8個),「老人自認

表-8 老人意識類型別にみた社会関係 (平均値)

		実数	インフォーマルな人間関係量				フォーマルな社会関係量
			総数	親類	近隣	友人	
尾倉地区	全体	368	12.0	4.4	4.0	4.7	2.6
	老人自認型	116	11.4	4.2	3.8	4.9	2.6
	老人自意識型	37	7.6	3.2	2.2	2.5	1.9
	老人否定型	52	16.2	6.0	5.2	6.8	3.2
	老人自律型	64	14.4	4.9	5.5	5.2	3.1
宮崎市	全体	360	16.7	7.7	3.6	5.7	2.7
	老人自認型	152	14.8	7.2	3.5	4.9	2.3
	老人自意識型	51	17.1	7.8	3.3	6.0	2.9
	老人否定型	59	15.7	7.9	3.7	5.1	2.6
	老人自律型	54	23.1	9.7	4.5	9.1	3.5

(備考)フォーマルな社会関係量については尾倉地区と宮崎市では回答肢の尺度が違うので地域比較は不可能である。

型」(3.7個),やはり「老人自意識型」(1.7個)において一番少ない。そして,「友人」,つまり友縁関係面では,「老人否定型」が6.8個と一番多く,以下「老人自律型」の5.2個,「老人自認型」の4.9個となり,「老人自意識

型」となると、一挙に減少して2.5個となる。他方、団体や集団への参加数であるフォーマルな社会関係量の方でみると、今回の調査対象者である尾倉地区の高齢者の社会関係量は、全体では2.6個となり、老人意識類型の中で「老人否定型」が3.2個と一番多いことがわかる。以下「老人自律型」が3.1個と続く。以下「老人自認型」が2.6個、「老人自意識型」が1.9個と、一番少なくなっている。

つまり、老人自意識型が、フォーマルな社会関係量、インフォーマルな人間関係量の双方で、一番値が低く、それだけ社会関係を持っていないことを示している。この反対が「老人否定型」で、このタイプの場合、インフォーマルな人間関係量の総数が4類型中で突出しており、フォーマルな社会関係量においても4類型中で一番多い値を示す。「老人否定型」は、インフォーマルな人間関係量では近隣の数(4.4個)が「老人自律型」に比べて少ないものの、それ以外の「親類」(6.1個)、「友人」(6.3個)の数では一番多くの人間関係量を持っている。社会関係量において「老人否定型」に次いで積極的なネットワークを張っているのが、「老人自律型」である。このタイプは、インフォーマル・グループの「総数」、「親類」、「友人」、フォーマル・グループとも第2位の値を示している。そして、「近隣」だけが4類型の中で一番多い。その点では、このタイプは、近隣関係に比重を置いているタイプといえる。これに対して、「老人自認型」は、「老人自律型」について人間関係量をもっている。「老人自認型」は、人間関係量では「親類」が3.9個、「近隣」が3.6個、「友人」が4.3個となっており、友人関係を重視したネットワークをもっていることがわかる。

これに対して宮崎市の老人意識類型をみると、「老人自律型」が人間関係量の「総数」、「親類」、「近隣」、「友人」のいずれにおいても他のタイプより多く、しかも社会関係量においても一番多く持っており、その点で一番ネットワークを持っているタイプであった。逆に、一番人間関係量と社会関係量が少ないのが、「老人自認型」であった。尾倉地区で人間関係量、社会関係量を一番多く持っていた「老人否定型」は、人間関係量、社会関係量

において3位の位置を占めるにすぎない。むしろ、2位は、尾倉地区で一番人間関係量，社会関係量が少なかった「老人自意識型」となっているのである。

以上からみると，この老人意識類型の各類型の人間関係，社会関係は地域構造によって相違することを確認しなければならない。いずれにせよ，農村部を控えた宮崎市の調査では，「老人自認型」が人間関係・社会関係の双方の上で数値が少なく，その点で孤立パターンをとっているのに対して，産業都市の尾倉地区では，むしろ「老人自意識型」の方が社会関係において孤立パターンを示していることがわかるのである。

表-9 老人意識類型別にみた老後開始要因

	実数	社会的地位の喪失	バイオメデイカルな地位の喪失	家族的連帯の喪失	経済的自立の喪失	その他	不明
全体	368	37.8	63.9	19.6	34.2	1.9	5.7
老人自認型	116	38.8	60.3	20.7	42.2	2.6	3.4
老人自意識型	37	21.6	54.1	18.9	37.8	5.4	5.4
老人自律型	64	45.3	76.6	14.1	26.6	1.9	1.9
老人否定型	52	48.1	71.2	15.4	26.9	-	3.1

(備考) $\chi^2=19.92, fd=12$

(4) 老後の開始，差別の認知・被害認知

老人意識類型の考察の最後に，限られたデータからこの老人意識類型が老後をどのように捉え，老人差別や自分自身に対する(老人処遇の)「いやな経験(被害感)」について簡単に触れておきたい。

まず，老後開始規定要因から以上の老人意識類型の特徴をみてみたい。表-9をみると，社会的地位の喪失を挙げているのは，「老人否定型」が48.1%と，一番高く，ついで「老人自律型」(45.3%)が高い。逆に「老人自意識型」(21.6%)が一番低い比率になっている。バイオメデイカルな地位の喪失を挙げているのは，社会的地位の喪失と全く同じで，「老人自律型」，「老人否定型」，「老人自認型」，「老人自意識型」の順で，やはり一番少な

いのが「老人自意識型」となっている。家族的連帯の喪失を挙げているのは、「老人自認型」が20.7%と、一番比率が高い。以下、「老人自意識型」、「老人否定型」、「老人自律型」の順である。経済的自立の喪失を挙げているのは、家族的連帯の喪失と同じく老人自認型が一番高く、以下「老人自意識型」、「老人否定型」、「老人自律型」の順となっている。

こうしてみると「老人自律型」と「老人否定型」が社会的地位の喪失とバイオメディカルな地位の喪失でもって老後の開始を判断し、「老人自認型」と「老人自意識型」が家族的連帯の喪失と経済的連帯の喪失でもって老後の開始を判断する傾向をやや持っていることが分かるのである。

表-10は、老人線意識、つまり老人とは何歳で始まるかという設問でもって老人意識類型の所在をみたものである。これから明らかなことは、老人線を高い年齢に設定する人が、「老人否定型」、「老人自律型」に多くみられ、逆に「55歳以上」とか「60歳以上」といった低い年齢に老人線を設定する人が、「老人自認型」、「老人自意識型」に多くみられるということである。

表-10 老人線意識別にみた老人意識類型

	合計	老人自認型	老人自意識型	老人否定型	老人自律型	不明
全体	368	31.5	10.1	14.1	17.4	26.9
55歳以上	2	50.0	-	-	-	50.0
60歳以上	10	50.0	20.0	-	10.0	20.0
65歳以上	2	47.1	17.6	5.9	5.9	23.5
70歳以上	164	39.0	10.4	6.1	17.1	27.4
75歳以上	98	28.6	8.2	26.5	15.3	21.4
80歳以上	33	3.0	6.1	24.2	36.4	30.3
わからない	16	-	6.3	31.3	31.3	31.3

(備考) $\chi^2=64.98, fd=18$

次いで、老人差別の認知と「いやな経験」についてみておきたい。

表-11より、老人排除認知といやな経験についてみてみよう。老人排除認知とは「現在の社会に老人を排除する仕組みが存在するか」どうかという内容の設問で、「ある」と答えたのは、尾倉地区では全体では25.5%であった。内訳は「老人自認型」が26.7%、「老人自意識型」が24.3%、「老人否

表-11 老人意識類型別にみた「老人排斥認知」と「いやな経験」

		実数	老人排斥認知		いやな経験がある	
			「ある」		「ある」	
			尾倉地区 (1)	宮崎市 (2)	尾倉地区 (3)	宮崎市 (4)
全 体		368	25.5	27.1	16.8	22.5
老人意識類型	老人自認型	116	26.7	28.9	12.1	17.1
	老人自意識型	37	24.3	45.1	37.8	41.2
	老人自律型	64	23.4	18.5	9.4	9.3
	老人否定型	52	30.8	22.0	30.8	27.1

(備考) (1) $\chi^2=0.87, fd=3$, (2) $\chi^2=12.16, fd=3$, (3) $\chi^2=29.45, fd=3$, (4) $\chi^2=22.76, fd=3$

定型」が30.8%、「老人自律型」が23.4%となっており、「老人否定型」に老人排除の認知度が高いことがわかる。老人排除の認知は、「老人否定型」や「老人自認型」に多いが、しかし、有意な差は確認できない。これに対して宮崎市のデータからは有意差が確認でき、「老人自意識型」においては「いやな経験」が「ある」と答えたものは45.1%もみられ、圧倒的に多いことが分かる。これをさらに、老人扱いされて「いやな思いをした」という被害経験みると、4類型ではいやな経験が「ある」と答えたのは、尾倉地区の「老人自意識型」で37.8%もみられ、「老人否定型」が次いで多く、30.8%となっている。「老人自認型」(12.1%)、「老人自律型」(9.4%)との差はかなりみられる。同様に、宮崎についてみても、「老人自意識型」が41.2%、「老人否定型」が27.1%、「老人自認型」が17.1%、「老人自律型」が9.3%と、「老人自意識型」と「老人自律型」との間には顕著な差がみられるのである。

尾倉地区では、老人排除認知は、老人意識類型との間では有意さがみられなかった。しかし、宮崎市では、「老人自意識型」に顕著に「ある」としたものがみられたように、有意さが確認できた。つまり、その点では尾倉地区の老人意識類型とは違った特徴を持っているということができそうである。そして、「いやな経験」が「ある」は、両地域とも老人意識類型は、同じパターンを示している。

4. 老人意識類型と自我構造

今回、調査した尾倉地区の高齢者の自己意識は、産業都市ということだけで独自の性格を持っているのであろうか。表-12は、地域別に高齢者の自我像の相関関係を求めたものである。自我像は、生きがい感、生活満足度、孤独ではない、家族に誇りをもつ、自己存在満足度、自己能力発揮度、社会的不可欠性、社会的貢献能力の8つの項目で調べてみた。

そこで、宮崎市と比べながら尾倉地区の高齢者の自我像の特性を探ってみたい。尾倉地区の高齢者の自我像項目の中で、相関係数の0.6以上を示すのは、「生きがい感」と「生活満足度」(0.65757)の間、「社会的不可欠性」と「社会的貢献能力」との間、そして「生活満足度」と「自己存在満足度」との間の3つのセルにおいてである。その他では「社会的不可欠性」と「自己能力発揮度」、「孤独ではない」と「生活満足度」、つまり、総計28のセルの平均値が0.39004であるから、0.5や0.4以上の値は、この尾倉地区での自我像要因間では高い相関を示すと考えてよいであろう。逆に「社会的貢献能力」と「孤独ではない」、「自己能力発揮度」と「孤独ではない」、そして「孤独ではない」と「社会的不可欠性」との間では、0.1台の相関係数しかみられず、「孤独ではない」という項目との間で自我像の値が低い値を示している。次いで、家族要因と自己要因の間で、生活満足度と社会的不可欠性・社会的貢献能力の間で0.2台の相関係数がみられ、このような要因の間で低いことが分かる。

8つの要因の平均値を求めてみると、尾倉地区では「生きがい感」の平均値が一番高く、以下「自己存在満足度」、「生活満足度」、「社会的不可欠性」、「自己能力発揮度」、「家族に誇りを持つ」、「孤独ではない」の順となっている。つまり、「生きがい感」が自己像の中では一番中心的な位置を占め、それに対して「孤独ではない」という項目が一番作用していなかったのである。言い換えれば、「生きがい感」を中心として「生活満足度」と「自己存在満足度」が結びつき、以下社会要因や家族要因などが関連している

構造となっている。それは生活要因を起点として「生活要因→自己要因→社会要因→家族要因」という形の関連で結びついている。「家族要因」の値が低いということは、尾倉地区の高齢者の自己像に関して、この家族要因が一番問題を秘めていることが分かるのである。

表-12 自我像要因の相関マトリックス

		生活要因		家族要因		自己要因		社会要因	
		生きがい感	生活満足度	孤独ではない	家族に誇りを持つ	自己存在満足度	自己能力発揮度	社会的不可欠性	社会的貢献能力
尾倉地区	生きがい感	1.00000							
	生活満足度	0.65757**	1.00000						
	孤独ではない	0.46307**	0.47585**	1.00000					
	家族に誇り	0.40861**	0.39951**	0.46810**	1.00000				
	自己存在満足度	0.62538**	0.61292**	0.46105**	0.42454**	1.00000			
	自己能力発揮度	0.43886**	0.30653**	0.17898*	0.24450**	0.37690**	1.00000		
	社会的不可欠性	0.36239**	0.27208**	0.18557**	0.20134**	0.38981**	0.58161**	1.00000	
	社会的貢献能力	0.30156**	0.23470**	0.16059*	0.25310**	0.32017**	0.45188**	0.66408**	1.00000
	平均値 ¹⁾	0.46535	0.42274	0.34189	0.34281	0.45868	0.36847	0.37955	0.34087
宮崎市	生きがい感	1.00000							
	生活満足度	0.51225**	1.00000						
	孤独ではない	0.44637**	0.32650**	1.00000					
	家族に誇り	0.48423**	0.40655**	0.39758**	1.00000				
	自己存在満足度	0.48332**	0.48464**	0.42597**	0.46997**	1.00000			
	自己能力発揮度	0.48846**	0.35129**	0.36203**	0.35872**	0.44257**	1.00000		
	社会的不可欠性	0.34624**	0.23671**	0.24871**	0.21922**	0.31310**	0.42557**	1.00000	
	社会的貢献能力	0.28436*	0.15214*	0.23646**	0.16486*	0.29038**	0.33776**	0.60503**	1.00000
	平均値	0.43503	0.35287	0.34901	0.35722	0.41571	0.39520	0.34208	0.29586

(備考) 数値は相関係数で、(**)は1%で有意(*)印は5%で有意を示す。1)平均値は、各相関する7項目との間の相関係数の平均値を表す。

それに対して宮崎市の自我像はどうかといえば、8項目相互間の総計セルの平均値は0.36787という値であって、尾倉地区に比べると、低くなっている。実際、0.6以上の相関係数は「社会的不可欠性」と「社会的貢献能力」の間であって、0.5以上の相関係数も「生きがい感」と「生活満足度」との間だけである。逆に、「生活満足度」と「社会的貢献能力」、「家族に誇りを

持つ」と「社会的貢献能力」との間では0.1位の相関係数しかみられない。ここでも8要因の要因間のネットワークを平均化した値でみると、「生きがい感」の値がもっとも高く、以下「自己存在満足度」、「自己の能力発揮度」、「家族に誇りを持つ」、「生活満足度」、「孤独ではない」、「社会的不可欠性」、「社会的貢献能力」の順になっている。宮崎市では「生きがい感」と「自己存在満足度」、「社会的貢献能力」の位置は、尾倉地区と変化ないが、「生活満足度」が5位に、「社会的不可欠性」が7位に落ち、逆に「家族に誇りを持つ」が4位に、「孤独ではない」6位、「自己能力発揮度」が3位へと上昇している。確かに両地域の平均値を比較すると、8項目のうち5つまでは尾倉地区が相関係数について大きい値を示しているが、家族要因の「孤独ではない」と「家族に誇りを持つ」と「自己能力発揮度」の3つが、宮崎市の方が大きくなっている。つまり、宮崎市では自我像として「家族要因」と「自己要因」が尾倉地区に比べて強かったことを物語るのである。それからすると、産業都市の尾倉地区では、「生活要因」と「社会要因」が、もっと具体的にいうと社会的な「能力」（社会的貢献能力、社会的不可欠性）と「満足」（「生活満足度」、「自己存在満足度」）が自己像に強く働いているということができよう。

この老人意識類型は、いまみた自我像とどのように結びついているのであろうか、つまり、各老人意識類型と自我像との連関をみておきたい。表-13は、老人の自我意識を老人意識類型の各タイプとの関連でみたものである。さきにわれわれは、「老人自意識型」の社会関係量を問題にしたが、自我構造では意識構造はどのようになっているのだろうか。表をみると、「老人自意識型」では、生きがい感、生活満足度、自己存在満足度、孤独ではない、家族に誇り、自分の能力発揮度、社会的不可欠性、社会的貢献能力の8要因においていずれも比率が最下位の値を示していた。つまり、「老人自意識型」は、自己要因、社会要因、家族要因、生活要因いずれとも最下位の値となっている。つまり、この「老人自意識型」の場合、自我像全体で数値が一番低くなっている。なかでも社会的不可欠性が18.9%というの

は、特筆してよいであろう。

表-13 老人意識類型別にみた自我像 (％)

		生きがい感	生活満足度	孤独ではない	家族に誇りを持つ	自己存在満足度	能力発揮度	社会的不可欠性	社会的貢献能力	合計
尾倉地区	全体	72.2	80.2	76.4	73.6	70.6	47.3	33.7	40.8	494.8
	老人自認型	68.1	82.8	85.3	76.7	69.8	47.4	27.6	37.9	495.6
	老人自意識型	59.4	67.5	54.0	48.6	62.1	32.4	18.9	27.0	369.9
	老人自律型	78.2	78.2	76.5	70.3	73.4	53.2	43.8	45.4	519.0
	老人否定型	92.3	96.1	92.3	86.5	84.6	73.1	61.5	65.4	651.8
宮崎市	全体	83.6	82.8	82.5	82.0	77.8	56.4	41.1	48.3	554.5
	老人自認型	79.0	78.3	80.9	78.2	71.7	48.7	34.8	42.7	514.3
	老人自意識型	84.4	80.4	78.4	84.3	74.5	58.8	39.2	37.3	537.3
	老人自律型	85.2	94.4	88.9	81.5	88.9	66.7	48.1	64.8	618.5
	老人否定型	94.9	91.5	88.2	93.2	89.8	64.4	56.0	66.1	644.1

(備考) 数値は、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計値である。

これに対して「老人否定型」は、生きがい感、生活満足度、自己存在満足度、孤独ではない、家族に誇り、自分の能力発揮度、社会的不可欠性、社会的貢献能力の8要因すべてで一番高い値を示している。

「老人自律型」は、生活満足度、孤独ではない、家族に誇りという項目以外は、「老人否定型」に次いで肯定的な比率が高い。つまり、このタイプは、自己存在に満足度を示したり、自分の能力発揮度も高いことから、4つのタイプ中で個人主義のタイプと考えられる。

最後に、「老人自認型」の場合は、生活満足度、孤独ではない、家族に誇りの項目が「老人否定型」に次いで2位の値を示し、残りの5項目は、「老人自意識型」ほど低くないものの、4類型中では第3位の値となっている。このタイプの場合、家族生活の安定が生活満足度となっているが、自分の持つ自己能力発揮度や社会的不可欠性、社会的貢献能力が、なかでも社会的不可欠性の項目が低いことが特徴となっている。

以上から老人意識類型を自我像に引きつけて解釈すると、産業都市の尾倉地区では「老人否定型」が突出した形で、自我像が安定しているタイプ

となっていることがわかる。「老人自律型」も、次いで安定しているタイプである。反対に「老人自意識型」は、極端に低くなっており、老人化意識を自我像の中からも形成していることが分かる。それと比べれば「老人自認型」は、やや安定している。ただし、宮崎市調査では「老人自認型」が「老人自意識型」よりも低くなっているため、常に「老人自意識型」が自我像の一番低位置を占めているわけではないことは留意しなければならない。

尾倉地区で問題となる老人意識類型は、「老人自意識型」であるが、このタイプの場合、本人自身が「老い」に対して積極的姿勢を示したり、自己の能力への積極的価値づけをせず、かえって無能性、消極性、非社会性という価値を内面化した結果、この意識を形成していると解釈できるであろう。

5. 結語

以上、われわれの社会における老人化処遇の側面を老人自身の自我ラベリングをめぐって分析してきた。

今回は、産業空洞型インナーシティ地域における老人自我ラベリングを分析したのであるが、老人自己成就意識に関して幾つかの知見が見いだすことができた。(1)産業都市に位置する尾倉地区では、老人自己成就意識の形成に関して年齢属性がまだ比較的強く働いているとはいえ、宮崎市のような伝統的な地域ほど作用していないということ、(2)性別属性は伝統的な地域に比べて、産業地域では希薄化し、それも年齢属性以上に希薄化していること、(3)そして、この意識形成には血縁や地縁の関係といった要因より友縁関係といった人間関係の量、さまざまな団体への参加である社会関係量に支えられていること、そして(4)男性の一部で老人自己成就意識形成が、早めに始まるのは、有職性と学歴を媒介してであること、また、概して大半の男性より大半の女性がこの意識を早く持つに至るのも有職性と学歴と関連しているということ、以上である。周知のように産業化や近代化

の進んだ社会では地位評価システムは、性・年齢のような生得的地域属性より職業や学齢といった達成的地域属性により高い評価をおいてきた。生まれながらに保持するものより生まれた以後の本人の努力の結果獲得するものにより高い評価をおく考えこそ、自由や平等の理念などの存在根拠でもあったわけで、産業化が達成的な地位の方を<主軸的地位>とするのも当然といえるかもしれない。今回の高齢者の老人自己成就意識形成に関する知見の一つは、産業化の地位評価を別の形で例証するものであった。つまり、産業化の進んだ尾倉地区での老人自己成就意識の形成には生得的地位より達成的地位の方がより作用していたということである。そして、いま一つ加えれば、尾倉地域における高齢者の老人自己成就意識の形成には、社会関係や人間関係と関連し、人間関係に関して地縁・血縁関係以上に友縁関係の少なさ、社会関係の少なさが関係するということが分かった。これは、産業化が地域社会構造において人間関係や社会関係において地縁・血縁関係よりも友縁関係を促進し、また団体参加や集団参加という形で社会関係を促進するという仮説を例証するものである。ただ、実際に老人自己成就意識の形成に結びついたのは、都市高齢者の問題としてしばしば指摘される孤立や孤独感の問題と同じく、孤立や孤独、特に友縁関係の少なさ、集団参加の少なさによる孤立・孤独感であった。

それから、ここでは、「老人否定型」、「老人自律型」、「老人自意識型」、「老人自認型」という4類型の老人意識類型を構成したが、この4類型には、今回調査した尾倉地区でも加齢化とともに「老人否定型」→「老人自律型」→「老人自意識型」→「老人自認型」へと進む傾向があることが分かった。そのうち「老人否定型」が積極的な性格を一番持っており、彼らは自己像の生活要因、家族要因、自己要因、社会要因のすべてにおいて高い数値を示し、この4類型の中では一番老人化を拒絶する類型となっていた。これに対して「老人自意識型」は、自己像の生活要因、家族要因、自己要因、社会要因のすべてにおいて低い値を示し、しかも人間関係量や社会関係量の点でも一番低い得点値を示し、差別認知や被害認知に関しても

一番強い値を示した。「老人自己意識型」は、産業都市における老人意識類型では一番問題になるタイプであることがわかった。

以上からみると、われわれは、高齢者が老人意識を持つようになる、あるいは持たされるようになるという老人化自己成就過程が高齢者自身の「生業の喪失（退職など）→身体の衰え→他者認知→老人自身の老いの自己承認」という過程を辿ると考えるが、高齢者が老人意識を自己成就するのは、そうした過程に介在する高齢者自身の生活する社会構造（伝統的な社会、産業社会、性差別社会など）、本人の持つ無能性・消極性や有職性や孤立性（社会関係量・人間関係量）や自我像などといった要因も関連するということを考慮に入れなければならない。それから、我が国の高齢者の老人自己成就意識の分析からは、まだ性差別がかなり大きく介在している事実も看過できないことも指摘しておきたい。本稿では産業化のなかで老人自己成就過程を構造論的・意識論的に分析したのであるが、高齢化の進んだ産業社会が過度に進んだ過疎社会における分析については今後の課題として残しておきたい。

〈注〉

* 本研究は1994～1995年度文部省科学研究費「インナー・シティにおける高齢者処遇過程の研究」の助成を受けてなされたものの一部である。

参考文献

- (1) Howard P.Chudacoff,1989,How Old Are You? Age Consciousness in American Culture, (Princeton University Press)『年齢意識の社会学』(法政大学出版局) 1994年
- (2) L.K.Gerge.,Role Transitions in Later Life. (Wadsworth.Inc) 1980,西下彰俊・山本孝史『老後』(思索社) 昭和61年
- (3) 井上俊「老いのイメージ」『老いの発見2』1986年(岩波書店)
- (4) 片多順『老人と文化一発年人類学入門』日本の中高年7) 昭和56年(垣内出版)
- (5) Sharon.R.Kaufman.,The Ageless Self-Sources of Meaning in LaterLife, (The University of Wisconsin Press),1986,幾島幸子訳『エイジレス・セルフ』(筑摩書房)
- (6) 河畠修『変貌するシルバー・ライフ』(竹内書店新社) 1989年
- (7) A. R. Lindesmith,A・L・Strauss,&N・K・Denzln.,Social Psychology (5th ed),1978,船津衛訳『社会心理学』(恒星社厚生閣) 1981年
- (8) 新村拓『ホスピスと老人介護の歴史』(法政大学出版局)
- (9) 新村拓『死と病と看護の社会史』(法政大学出版局) 1989年
- (10) 総務庁長官官房老人対策室編『長寿社会と男女の役割・意識』平成2年
- (12) 宮田登・中村桂子『老いと「生い」』(藤原書店) 1993年
- (11) Nancy J.Osgood.,1992,SUICIDE IN LATER LIFE,(Lexington Books),野坂秀雄訳『老人と自殺』(春秋社) 1994年
- (11) 新村拓『老いと看取りの社会史』(法政大学出版局) 1991年
- (12) Irving Rosow, Socialization to Old Age, 1974(University of California University), 嵯峨座晴夫監訳『高齢者の社会学』早稲田大学出版部, 1983年